

## ロマのスウェーデン文化との統合

— ドラッグスペール奏者カール・ユールボー（Carl Jularbo） —

### 石 渡 利 康

Toshiyasu ISHIWATARI. The Integration of a Roma Musician with the Swedish Culture: In the Case of a Famous Dragspelare Carl Jularbo. *Studies in International Relations* Vol.38, No.1. October 2017. pp.19-23.

Carl Jularbo (1893 – 1966) was the most famous dragspelare (Swedish accordionist) and a composer of folk music. This short paper shows how a man of Roma (Gypsy) lineage integrated himself with the Swedish music culture.

#### 1. 問題の所在

中央ヨーロッパから見ればペリフェリーに位置するスウェーデンには、少数民族が幾つか存在する。主として北極地域内に居住しトナカイの放牧で知られるサーメ人、フィンランド人、シィェーナレ (zigenare), それに難民である。こうした少数民族の中で、現在特に問題となっているのは増加するいわゆる「難民」である。ここでわざわざ「いわゆる」と書いたのは、国際法的概念での本来の難民ばかりではなく偽装難民もいるからである。

誤解されるのを恐れずにいえば、数年前に非難の対象となった漫画家のはすみとしこの「そうだ難民しよう」は、部分的には事の真実を表現しているのである。同じ北欧でも、デンマークは難民受け容れに厳しい政策を採り、それを対外的にも周知させている。

多くの難民を受け入れてきたスウェーデンでは、難民問題は国家が誇る福祉政策にも影響を与えている。高額税金によって保障される自国民に対する福祉の財源が、難民保護の分野に使用されるからである。その分だけ国民に対する保護が手薄になるのは、当然である。医療現場では、難民に対してプライオリティーが示されるといった事態まで生じている。

難民の多くは、イスラム教徒である。イスラム教徒の習慣、思考、人権意識、富者と貧者との関

係に対する感覚、男尊女卑の行動、女性の服装規制などは男女平等社会を達成しているスウェーデンと相容れない部分も多い。こうした事象から生じるのは、社会的脅威を伴った難民という存在との間の「文化価値摩擦」である。

シィェーナレは、こうした難民とは全く別に位置付けられる存在である。日本では一般的にジプシーの呼称で知られる人々は、スウェーデンではシィェーナレと呼ばれるのが一般的ではあるが、ロマ（単数形はロム）と云われる場合も多い。ロマとは、彼らの言葉で人間を意味する。呼称の問題だが、ロマ以外は差別用語だから避けなければいけない、という意見がある。しかし、私がワルシャワで偶然出会い、コーヒーと音楽で遇してくれたロマの小集団は、ジプシーでも問題ないと云っていた。彼らの間でも意見が統一している訳ではないようである。しかし、本稿では、以下通常はロマの呼称を用いることにする。

移動民としての歴史をもつロマは、スウェーデンにおいて本来社会的脅威としての存在ではなかったし、現在もそうではない。

しかし、北方ゲルマンとしての民族的同質性をもつスウェーデン人にとって、独特の文化をもつロマは異質の存在であることに間違いない。ロマは一種の「まれびと」だったといってもいいであろう。

この小論は、スウェーデンにおける著名なロマ

のドラグスペール (dragspel) 奏者を例に取り、異文化融合の問題を少しばかり考察してみようとするものである。ドラグスペールとは、通常アコーディオンといわれる楽器である。

スウェーデンは、「統合政策」(integrationspolitik) を国策として採ってきているので、この種の問題を考えてみることは、不可欠であると思われる。

## 2. スウェーデンのロマ

ロマの起源に関しては、1000年頃インドの北西部から欧州へ移動したとされているが、諸説もあり明確なことは分かっていない。ロマの起源や実態について完全に解明されていない主な理由には、彼らの多くが移動し、国家の公的コントロールの下に置かれなかったという事実が挙げられる。

史実によれば、ロマは11世紀の中頃にコンスタンチノーブルに出現している。14世紀には、クレタ島、コルフ島に居たとの記録がある。欧州各地に移動するにつれて、彼らに対する呼称も、シンティ、マヌシュ、ジタン、ツイゴイナー、ジングロ、ヒタノ等々と多様化していった。

ロマが欧州大陸とその周辺に移動、拡大し、やがて北上してスウェーデンにやって来たのは、1521年のことである。移動民として生活していたロマは、自由の民、激情、それらを表象する踊りや音楽、彼らの間での厳格な掟など一種憧れの対象として見られた。

しかし、同時にそれに反して、農耕を生活の糧とする堅実な生活形態をもつスウェーデン人にとってロマは怠惰な民族であると見做されるようになった。異質な存在に対する視点は、差別観を生み出していった。

時は経ち、第1次大戦後、ロマの移動の自由は制限されるようになった。国境での審査が厳格さを増すと同時に、社会的ダーウィニズムと生物学的人種主義がロマを下層人間としたためである。スウェーデンでも1914年ロマは好ましくない人々とみなされ、1954年までロマは移民禁止とされた。

こうした行為の背景には、ゲルマン人至上主義が幅をきかせ、ロマはユダヤ人と共にゲルマン人種の純粋性に対する脅威であるとの、ドイツを中

心とする考えがあった。スウェーデンもその影響を受けたのである。

スウェーデンでは起きなかったが、ドイツではナチスによって人体実験とホロコーストの犠牲になったロマの数は数十万人に達すると推定されている。

現代のスウェーデンにおけるロマの数は、1万人とも2万とも云われている。数字がはっきりしないのは、大部分のロマはスウェーデンの国籍をもっているからである。したがって、ロマと云った場合、それはロマ文化を潜在的に継承しているロマ系の血筋の人を意味することが多いのである。

スウェーデンは、2008年に「反差別法」(Diskrimineringslag) を施行し現在に至っている。人種による差別、性差別を初めとして諸種の差別が禁じられている。したがって、ロマおよびロマ系の人に対する差別も当然禁止されている。

実際、国民のロマ観も大きく変化している。2016年のPEW調査によると、ロマに反感を持っていないとする意見が54%、持っているが42%である。54%という数値は、ヨーロッパ諸国の中では最高である。ちなみに、何かと憎悪あるいは反感の対象となるユダヤ人に対しては親ユダヤ92%、反ユダヤ5%である。これと比較すると、ヨーロッパでは最高であるにしろ、ロマに対する反感は、まだ拭いきれてはいないといえよう。「反差別法」も人間の心の中にまで浸透できないのである。

これに加えて、最近では新たな事態が生じている。欧州連合域内の人の移動自由が認められようになって、貧しい国からEU-migranter (EU移住者) と呼ばれる人々が富めるスウェーデンに押し掛けて来ている。こうした移住者の約半数の2000人は、ルーマニアやブルガリアのロマである。

彼らは、祖国で差別を受けて暮らしているので、夢を求めてやって来るのである。しかし、彼らにとって、スウェーデンは決して天国ではない。技能を持っていない彼らの多くは、物乞いをして日々を過ごしているのである。こうした彼らに対する呼称は、「物乞いEU移住者」(tiggande EU-migranter) である。

現在、全国民総数1千万に満たない人口のスウェーデンで、外国生まれの人は約160万人であ

る。こうした国情の中で、統合政策に関わる問題は常に研究対象となり得るのである。

### 3. カール・ユーラルボー（Carl Jularbo）の音楽

本研究誌の2号前に書いた拙稿「他異権・難民・ヘテロトピア・文化価値摩擦—スウェーデンの難民大量受入れ問題—」の中で簡単に紹介したのでいささか気が引けるのであるが、以下の歌詞は、カール・ユーラルボーが自ら作詞、作曲した多くの作品の中で、スウェーデンで知らない人がいないほど特に人々に親しまれているものなので、再度掲載することにする。（彼の弾く曲の素晴らしさを聴きたい方は、YouTube を利用して戴ければ幸いである）。訳は、拙訳である。

“Drömmen om Elin”

Vad jag drömt om dig  
Lilla Elin lik som sommarns vind  
Söt som sockerstrut  
Med brun och fjunig kind  
Under alla år  
Har jag burit med mig drömmen  
Drömmen om Elin  
Leende under en blommande lind

Vad min dröm är skön där är du så ung och  
varm och ljus  
Solen i ditt hår  
Ett avsked vid ditt hus  
I min ensamhet vänder jag till drömmen  
Drömmen om Elin  
Barbent i tunn sommarblus  
  
Elin i min dröm  
Går ditt skratt mot skyn som en ballong  
Du far  
I min famn och vinden drar en sång  
Det blev aldrig vi  
Men jag drömmer ändå drömmen

Drömmen om Elin  
Och om en sommar en gång

『エーリンを夢見て』

心に想うは君のこと  
夏風のように爽やかで  
綿菓子のように甘く  
陽にやけた柔肌の頬  
いつも夢見る君のこと  
若樹に下で微笑んでいる  
愛しのエーリ  
心に抱くは君のこと  
夕陽に映えるブロンドの髪  
君の家から帰るとき  
はや孤独の念に覆われて  
心を占めるは君のこと  
素足に夏服の愛しのエーリン

夢の中のエーリン  
笑顔は風船のようにはじけ  
歌声となり風に乗っていく  
夢だけど夢でもかまわない  
あの夏がまた来て欲しい

カール・ユーラルボーは、1893年風光明媚で知られるダーラナ地方の寒村ユーラルボーで生まれ、1966年ストックホルムで亡くなった。73才の人生であった。元々の姓名はカールソンであったが、カール・オスカル・ユーラルボーに変えた。このユーラルボーは地名から採ったものである。彼は、親しみをもって、カッレ・ユーラルボーと呼ばれることも多い。

彼の父は、雑貨の行商人で、母と9人の子供を養っていた。両親ともロマの家系であった。行商に同行したカールは、5才からドラッグスペールを弾きこなし、16才から23才の間に158のコンテストで優勝を重ねた。当時のスウェーデンではドラッグスペールの奏でるダンスが大きな娯楽であったから、彼の名前は一躍有名となった。北欧全体のレコードの収録曲は3000曲を数えている。こうして、彼は「ドラッグスペールの王」と称される

ようになったのである。

108曲にのぼる作曲や作詞の中で特に有名なのは、上記の『Drömmen om Elin (エーリンを夢見て)』、『Livet i Finnskogarna (フィンスコガの人生)』、『Nya Värmlandsvalsen (新ヴェルムランド・ワルツ)』等々である。

音楽評論家を含めた様々な論者の見解を纏めてみると、カール・ユーラルボーをドラッグスペールの最高者としているのは、次のような理由である。

まず第1は、彼の作曲がスウェーデン固有の農村の雰囲気表現し、それを堅持しているということである。

第2は、彼の作曲成果には、「読み人知らず的」に流布されて地方に存在していたものに手を加え、より洗礼されたものが存在するということである。

第3は、彼自身の作品ばかりかその他のドラッグスペールの曲に、ロマの人たちがもつ生の歓びと哀愁が巧みに含まれているということである。

第4は、ドラッグスペールによる彼の音楽への深い思い入れが感じられるということである。

第5は、彼が演奏を至る所で行なったということである。ドラッグスペールの音楽は、お高く留まった音楽ではない。スウェーデンを初めとするノルウェーなど北欧諸国では、夏は野外、海辺の傍の俄造りのダンス場で、冬は室内でのダンス会場でダンスのために演じられるものである。つまり、民衆の楽しみのための音楽なのである。ロマにとっても、音楽は流浪の民であった古い時代から心を和ませ生きる歓びを表象するものであった。この点において、ドラッグスペールの音楽は、スウェーデンの民衆とロマに共通の性格をもつものなのである。

#### 4. 文化融合に関わる新概念としての「既存実体（概念）の抽出とその価値の承認」

カール・ユーラルボーのドラッグスペール音楽は、なぜこれ程までにスウェーデンの人々に好まれたのであろうか。技術的に優れており、その音色が人々の心に染み入ったのは確かである。

しかし、これらだけが理由でないように思え

る。なぜ、彼だけが「ドラッグスペールの王」(dragspelskungen)と呼ばれるようになったのか。考え込んでなかなか解答には辿り着かない。

面白い現象だが、ある事に専念していると、答えが向こうからやってくることもある。

6月10日(土)のテレビ朝日の番組「世界が驚いたニッポンスゴ〜イデスネ視察団」を視ていた時のことであった。この日は、フランスの宗教建築家と宗教像の制作者が高野山を訪ねた後、「大仏師」の仕事ぶりを見ながら、質問をしていた。

「どうやって仏像を彫るのですか」というフランス人の質問に対して、師匠と呼ばれていた年配の大仏師は、こういう趣旨の答えをされたのである。「彫って作るではありません。木の中に既に仏様が居られるのです。それを、私は周りを削って取り出しているだけです」。

簡単ではあるが、極めて深みのある言葉である。

大仏師は、仏像作成を「仏(像)という既存実体(概念)の抽出である」と意識しているのである。もちろん、木の中にある仏像は私たちには見えない。仏像という既存実体は、大仏師の意識に表れた直観的な表象なのである。しかし、彼にとって、仏像は紛れもなく確実に存在しているのである。

こうした事を考えながら、思いをカール・ユーラルボーのスウェーデン文化との統合の問題に転じてみた。

それぞれの文化には、その中に既存の実体(概念)がある。既存の実体(概念)とは、平易な言葉で極論していえば「××に固有のらしさ」である。スウェーデンについていえば、それは svenskhet (スウェーデンらしさ) である。デンマークでは、danskhed (デンマークらしさ) となる。

異なった文化の統合とは、他の文化のもつこの「らしさ」という既存の実体を抽出し、その価値を認め思考と行動を共にすることではないだろうか。カール・ユーラルボーはダーラナ地方(Dalarna)の寒村に育ち、当時の基本的な農村社会の空気の中で既存概念である「スウェーデンらしさ」を体得したのである。それに、彼の心と血に流れるロマの音楽感覚が融合してスウェーデン国民の心を掴んだのである。

以上が、なぜ彼の音楽が広く人々に愛されてきたかの現時点での一応の結論である。

## 5. 残された課題

しかし、問題はまだ残っている。それは、異文化の「統合」と「融合」の定義と内包に関わる事項である。統合とは、機能等を効率よくするために複数をまとめて1つのまとまりのあるものにするのである。これに対して、融合とは、複数の組織が混合し、元の組織の痕跡を留めない状態にすることである。

ドラッグスパーを初めとする音楽が、異文化間の統合と融合にどのように作用してきたかを実証するのは、これからの課題である。

## 参考文献・資料

- 石渡利康：「ジプシーの自由と死とその周辺問題—『ジプシーは空に消える（Т а б о р у х о л и т в и е б о）からの小考—」，日本情報ディレトリ学会誌，Vol.11，2013年。
- 石渡利康：「非領域的マイノリティー—欧州におけるロマ（roma）」，国際関係研究，第18巻第3号，平成10年。
- 石渡利康：「他異権・難民・ヘテロトピア・文化価値摩擦—スウェーデンの難民大量受け入れ問題—」，国際関係研究，第36巻2号，平成28年。
- 伊藤千尋：『「ジプシー」の幌馬車を追った』，大村書店，1994年。
- 関口義人：『ジプシー。ミュージックの真実—ロマ・フィールド・レポート』，青土社 2005年。
- Alsmark, Gunnar: “Många slags svenskhet (Debat)”. Kulturhistorisk tidsskrift, vol.80, nr.1-2, pp.92-94, 1997.
- Befolkningsstatistik. Sanmandrag. 2015.
- CD. Carl Jularbo. Mina Dragspel. Klara skivan. 1997.
- CD. Carl Jularbo. Drömmen om Elin. Solna. 2008.
- Debatt. Fredag 9 Oktober 2015.
- Eriksson, Birger: Carl Jularbo: Spelmannen, 1993.
- Expressen. Söndag 11 Januari 2017. “Tattarun-  
genblev dragspelskungen.”
- Fugler, Corine: “Stop treating Gypsies like Social Outcasters”. Forum, Feb. 1992.
- Jakubowski, Jackie: “Rättslös i Europa. Zienarnas situation allt värre”. Dagens Nyheter, 09-10-1994.
- Johansson, Wictor: Dragspelet—hyllatochforaktat (<http://musikverket.se/svensktvisarakiv/artikel/drag-spelet-hyllat-och-foraktat/最終確認1-06-2017>)
- Jularbo, Carl: Med dragspelet i högsätet. 1946.
- Karsson, Ingmar: “Zienarn—90-talets stora Flyktingsproblem”. UD Promemoria.18-05-1992.
- Norlén, Ingmar: Calle Jularbo, Tidernas drag-spelkungen. 2005.
- Sima, Jonas: DVD-film “Dragspelskungen. Dokumentar om Carl Jularbo 100 år”. 1993.
- Sima, Jonas: Dragspelskungen. Dokumentar om Carl Jularbo 100 år. Minnesporträtt. (<http://www.sima.nu/film-jularbo.htm> 最終確認 14-06-2017)
- SVT. Presskonferansen om flyktingsituationen. 2015-10-9.
- Swanstein, Filippa & Henrikz, Karin: Diskrimineringslagen- från princip till praktik. 2014.
- Verspaget, Josephine: Report on Gypsies in Europe. Council of Europe. Document 6377. 11-01-1993.
- Wiktrin, Kajsa: Svenskfolkmusik är också romsk. (<http://studieforbunden.se//medlemsservice/folkbildning-mot-rasism/svensk-folkmusik-...> 最終確認 14-06-2017)